

音楽とともに生きること

キム・ジョンウン

1. 動機
2. 対話
 - 2-1. 対話相手について
 - 2-2. 日本の音楽へのこだわり
 - 2-3. 自分にとって音楽の持つ意味
 - 2-4. 将来と音楽のつながり
3. 結論
4. 終わりに

1. 動機

私が日本語の勉強を始めたきっかけは、中学3年のときのひょんなことからだった。期末試験を終え、夏休みを目前に控えていたある日、社会化の先生が授業中に「息抜き」としてみんなに聞かせてくれた歌。それは、宇多田ヒカルの「ファースト・ラブ」という曲だった。初めて聞く異国の音楽。何を言っているのかはまったくわからなかったが、きれいで繊細な旋律に一瞬で魅了された。そして、やはりこの歌は何を伝えようとしているのか、つまり歌詞の意味を知りたくなった。そこから独学の日本語勉強が始まった。教材は歌の歌詞だった。誰かにCDを借りるなり、ネットでMP3ファイルを探すなりして、とにかく日本の音楽を聞きまくった。音楽を聞くことが楽しかったからこそ、日本語の勉強も楽しかった。その前までは、漫画家志望だったが、才能のなさに挫折し、これから何をしていけばいいのか悩んでいた時期に出会ったからかもしれない。高校生になると、音楽雑誌などを買って、インタビューの翻訳の練習なども始めた。宿題でもなかったし、誰か褒めてくれるわけでもなかったが、私には一番やり甲斐のある作業だった。

そのうち、日本の音楽だけでなく、韓国の音楽や西洋のも聞くようになった。主に聴くのはロックで、それ以外のジャンルはあまり興味を持てなかった。ロック好きはどんどんエスカレートし、インディーズバンドの追っかけ時代を経て、大学ではバンドサークルでボーカルをつとめた。

私のこの音楽好きぶりは、自分でも未だに不思議に思う。なぜなら、それまでは音楽というものにまったく興味がなかったからだ。リズム感もなければ音痴だったし、楽器も苦手で音楽の成績はいつも最悪だった。そんな私の日常にいつも音楽が流れ始めたのだ。今も、未来も、出来るだけ音楽にずっと触れていたいと思う。しかし、最近ふと思う。音楽とはいったい自分の人生でどういう意味を持つのか。音楽とは自分にとって何なのか。そして、これからの人生で音楽とのかかわり方はどう変化していくのか。これらのことを対話相手との対話を通して考えていきたいと思い立ったのだ。

2. 対話

2-1. 対話相手について

対話相手はかれこれ8年の付き合いになる知り合いの姉さん、Cさん(韓国人)を選んだ。選んだ理由はまず、現在Cさんは日本に来ていて、会う機会が比較的多いこと。それから筆者とほぼ同じぐらい音楽マニアであることと、いつもアドバイスをもらったり、相談に乗ってもらっていること。また、筆者のことを知り尽くしている人ということである。対話はCさんの家で、すべて韓国語で行われた。

2-2. 日本の音楽へのこだわり

1回目(厳密には2回目)の会話をする前に、正直少し不安はあった。今までCさんと音楽を話題にした会話は結構してきたつもりだし、お互いをよく知っていると思っていたが、実はこういった「人生」が話のテーマに関わってくる深い話はめったにしていなかったのであった。しかも、「厳密に1回目の対話」を試みたとき、今までどういう音楽を聞いてきたかについての「ただのおしゃべり」になってしまった失敗があるため、今回は余計緊張してきた。

とりあえず、訂正した動機文を読んでもらい、対話で話していきたいことについて簡単に説明した後、対話をはじめた。最初の話題は、「なぜ日本の音楽?」。日本の音楽のどこが好き?と聞かれると、いつも答えに困る。今まで考えたこともなかったし、気がつけばもう夢中になっていた。なぜ自分はそこまで日本の音楽にこだわるのかを、自分でもよくわからないままだ聞いていただけということになる。Cさんも日本の音楽マニアではあるが、同じくらい洋楽や韓国の音楽もジャンル問わず幅広く聞いているので、答えまでとは行かなくても、ヒントを教えてくれそうな気がした。

2008年12月5日PM11:30~

C: そもそも、何で音楽嫌いだったの?

K: 動機文にも書いたけど、私、ものすごい音痴だったのね。リズム感もぜんぜんなくて(笑)。4歳か5歳だったと思うんだけど、叔母さんがうちに遊びに来てて。そのとき、私が幼稚園で習った歌を歌ってたら、いきなり叔母さんに「ジョンウンちゃん、音痴なんだね」っていわれて(笑)。子供ながらに超ショックだったの。それがたぶんトラウマになって、音楽が嫌いになったんだと思う。学校で歌唱試験とか大っ嫌いだったし。

C: (笑)おばさん面白い!!で、中3までずっと嫌いだったけど、宇多田ヒカルで急に好きになったと。

K: そういうこと。

C：宇多田ヒカルの何がよかったの？何がそこまで音楽に夢中にさせたのかな。

K：えーどうだろう。歌詞はぜんぜん意味わかんなかったから違うね。やっぱりメロディだったと思うな。今聞いてもファースト・ラブ名曲だもん。

C：たしかに。でもさ、歌のメロディに惚れて歌詞調べようとするのってよっぽどのことじゃん。

K：えっ、そうかな？

C：逆にさ、洋楽とかもよく聴くじゃん。で、すごいいい曲、感動するくらいの曲に出会った。さて、歌詞調べる？

K：あーしないかも。MUSEとか好きだけど、歌詞知らない・・・。

C：ね？だから、私が思うに、「日本の歌」だったから調べたんじゃないかなあって。Kさ、昔は漫画家になりたいって言って、日本の漫画とかよく読んでたじゃん。九州旅行とかも一緒に行ったし。つまり、もともと日本にすごい興味があって、どこかで日本語勉強したいって気持ちがあったんだよ。でも、漫画家もあきらめ切れなかったから、思い切って日本語に踏み切れない。そこで、宇多田ヒカルなのよ。歌はいわば媒介だね。Kと日本語をつなぐ。

K：なるほど。じゃあ、私が日本の歌ならジャンル問わず好きなのに、洋楽とかはロックしか受け入れられないのも同じ現象かな。

C：かもね。基本的に日本の文化が好きだから、日本の歌ならなんでもドンと来いなんだよ。日本文化のすべてが知りたいとか言ってたよね。日本の音楽もすべて知りたがってるんだよ、実は。

私は今まで、音楽全般が好きなら、日本以外の国の音楽（韓国の音楽も含む）も好きになるはずなのに、そうならなかった自分を不思議に思っていた。今回の対話を通じてひとつわかったのは、私は日本に興味を持っている自分と、日本の音楽が好きで自分のことを切り離して考えてきたということだった。つまり、音楽が好きというより、日本のサブカルチャが好きと言ったほうが正しいかも知れない。洋楽はロックが好きということは、純粹に音楽が好きで自分がいて、その中でもロックというジャンルが好きだと考えられる。どっちにせよ日本の音楽との出会いは、日本語を学ぶきっかけを与えてくれたし、嫌いだった音楽を大好きなものに変えてくれた、私の人生のターニングポイントである。

2-3. 自分にとって音楽の持つ意味

音楽と出会ったことで、自分の人生が変わった。でもこれは、私の中での大前提—音楽はなくてはならない存在である—の理由にはならない。音楽は私に何を与えてくれるのか、音楽は私の人生の中でどういう意味を持つのか。

2008年12月6日AM1:00～

K:でも、ときとき思うんだよね。たしかに音楽は好き。なくてはならない存在。でも、なぜなくてはならないのか聞かれると、答えられない。そもそも音楽って何だろう。

C:う～ん、難しいね。でも、よく「こういう場面ではこういう歌を」ってあるじゃん。たとえば、最近寒くなってきたし、ここ(日本)だと知り合いとかあんまりいないから、寂しいし。だから私はなんとなくSMAPの「オレンジ」が無性に聞きたくなるんだよね。あと、「どんないいこと」とか。

K:あ～わかる！しかも、曲に対する思い出とかあると、それを思い出すたびに聴きたくなる曲とか。

C:そう。音楽ってけっこう日常生活に関わってくるのよね。

K:う～ん、この説明あってるのかわかんないけど、音楽って実は非日常的なものじゃん。だって、普通に会話するとき、歌で会話したりしないし。だからミュージカルは嫌いという人もいるわけで。でも、たまに日常ですごいパワーを発揮したりもする。さっき言ったように、いろんな場面で登場するってのもあるし、特別な、たとえばほら、誕生日とか。うた歌って祝うじゃん。普通に「おめでとう」って言うより、「ハッピーバースデートゥーユー」って歌うほうがなんか、もってめでたしっていか(笑)。

C:なるほど(笑)。そういえば、昔こういう実験があった。テレビでやってたんだけど、ホラー映画を観客に見せるとき、BGMを全部消して見せたら、あまり怖がらなかったという。

K:あ～あったね。そう、それ。だから、要するに音楽って、言葉ではうまく説明できないけどすごい力を持っていて、私や姉さんは、人よりその音楽からもらう力の量が多いってことかな。

C:そういうことかな？主にもらっているの元気だけ(笑)

たしかに、音楽好きの私としては、普通の人より日常のいろいろな場面で音楽を必要とする。たとえば、移動するときは必ず音楽が必要である。街を歩くにしても、電車やバスに乗るにしても、小説を読んだり携帯電話をいじったりするよりは、音楽を聞きながらのほうがずっと安定している気がする。一年ほど前にこういうことがあった。その日はたまたま音楽プレイヤーの充電を忘れて、電池残量が少ない状態で長時間移動することになった。案の定、途中で電池が切れ、音楽が途絶えた瞬間、周りの話し声や電車の音などが波のように一気に耳に飛び込んできて、急に情緒不安定になった。なんとなく自分の中のリズムが壊れた気がした。一人でいるときも、何かしら「音」がないと、相当不安定になる。また、嬉しいときにはアップテンポの音楽を聞くとテンションがさらに上がって、嬉しさが倍になるなど、私の人生のさまざまな場面で登場する音楽は、もはや自分の一部となっているの

ではと思う。

2-4. 将来と音楽とのつながり

最近頻繁に思うのが、今の状態で私は本当に大丈夫かということで、つまり、今のように趣味に没頭する余裕があるのかということだった。4年生になって、就職について真剣に考えたとき、先輩方からいろいろアドバイスをもらったのだが、就職活動中も、就職した後も、今みたいにのんびりする時間はまったくないという言葉が引っかかったのだ。それは音楽だけでなく、他の趣味にも共通する悩みであるが、特に音楽の場合、2-3でも書いたように私の日常生活になくてはならない存在であるため、それに触れる時間が減るということは、私にとって非常に悩ましいことであった。

2008年12月6日AM2:30~

K: 問題は、いつまで続けられるのかってこと。

C: なにが?

K: たぶん、これからも音楽が好きってことは変わらないと思うんだけど、まずね、今までどおりしょっちゅう音楽聞いたり、コンサートやミュージカル見に行ったり、できるのかと。簡単に言うと、趣味に費やす時間なんぞあるのかと。これ、私はかなり悩ましい問題だったんだけど、先週、知り合いの日本の人にばっさり切られてさ(笑)。その人もう44で仕事してるし息子さんもいるのね。その人に話したら「社会人になるとお金だけはあるから、なんとかなる。今より豊かになる」って言われた。ごもつとも(笑)

C: ごもつとも(笑) 私も、別に悩む必要はないと思うな。

K: なんで? じゃあ、これからも音楽にどんどんお金と時間を費やしてしまえってこと?(笑)

C: うん(笑)。というか、時間がなくなっても、がんばって音楽に触れ続けてほしいな。お金は別として(笑) だって、そこまで音楽に詳しくなってるんだから、損になるはずがない。むしろ、なにか得してるはずよ。今も。

K: う〜ん……。あ、初対面の日本の人と話すときに、音楽の話題切り出されたりすると、私すごい日本の音楽知ってるから、そこからどんどん話が広がっていくのね。こういうことかな。

C: まさにそれですね〜(笑) それが社会に出て、たとえば、接待で日本の人とカラオケ行ったときに確実に盛り上げられるじゃん。得してるよ〜

K: そこ?!(笑) でも、本当そうだよな。損にはならないよね。通訳とかするときも、音楽用語とかパパッと出ちゃったらカッコいいしね。ここはもうちょっと勉強するところだな。まだまだ先は遠

かったよ～。

今回の対話の前に、一回ほかの知り合いの人に同じテーマで対話を試みたが、そのとき言われたのが上にも書いてあるように、「お金はあるからなんとかなる」という、ものすごくさっぱりした感じの答えだった。最初は、「そんなもんかな」と思ったが、自分で考えていくうちにだんだん違う感じがしてきた。そして、今回の対話で「音楽でなにか得する」という認識が今までの自分の中にはなかったということに気づき、ひとつの突破口を見つけたような気分になった。私は将来できることなら通訳や翻訳の仕事につきたいと思っているのだが、それはどこまでもぼんやりとしたイメージだった。しかし、この対話でひとつの分野を決め、その分野の専門家として通訳、翻訳をするという道もあるということもわかってきた。

3. 結論

今まで一言で「音楽が好き」と言っても、具体的にどういう音楽のどこがどうして好きかという深い話になると、「好きなものに理由なんかないし、それは仕方がない」という風にごまかしてきた。しかし、今回の活動を通して、全体的にいろいろな新発見があり、自分の中で音楽という存在にちゃんと整理がついた。自分にとって音楽はここまで大事な存在ということや、音楽の持つ力を発見したこと。特に日本の音楽は私の人生をも変えてしまうほど偉大だということ。ここまで好きなら、とことん楽しんで、自分の将来にプラスになる存在にしていればいいということなど。一人で考えていたときにはなかなか出てこなかった発想がポンポンとでてきて、非常に楽しい活動であった。この活動で得たヒントを基に、人生を音楽とともに生きていきたいと思う。

4. 終わりに

今学期のこの授業は、実に新鮮な感じだった。趣味のひとつである音楽について、ここまで真剣に考えたのも初めてだったし、対話相手との対話を通じて、と言うレポートの書き方も初めてだった。レポートが終わった後、クラスのみなさんと「いいレポートとは」について話し合ったり、自分のレポートを評価してもらったのも、もちろん初めてのことだった。なにもかも初めてのことばかりで、「新しいもの」に挑戦することがあまり好きではない私としては、最初かなり大変だった。しかし、一連の活動を通して、今までの自分を振り返ってみたり、他の人の人生にかかわる大事な話しが聞けたりして、結果としては非常に楽しい一学期間になったと思う。